

うたびとI
目次

*目次は、上の段から、歌人 表題 ページ。
*歌人は生年順とし、評論は執筆年の順に並べた。

正岡子規	正岡子規のうた	9
	子規と鉄幹	11
樋口一葉	一葉の恋のうた	13
与謝野鉄幹	鉄幹のうた	16
	「明星」創刊号の和歌論	19
太田水穂	水穂と茂吉	22
	水穂の歌と象徴	24
	太田水穂の人と歌——命ひとつ露にまみれて	27
窪田空穂	窪田空穂のうた	43
与謝野晶子	晶子のうた	47
斎藤茂吉	茂吉の歌集	51
	茂吉のうた	54
	斎藤茂吉のうた(1)～(5)	57
	茂吉と夕暮の一首——眠られぬ夜のために	71
若山牧水	牧水「別離」おほえがき	73
	教科書の中の牧水のうた	79
	牧水の歌と喜志子の歌——子ども	84
柳原白蓮	柳原白蓮——その評価と位置づけ	86
	『踏絵』	91
石川啄木	改めて読む啄木の歌	93

3 目 次

積 迢空	ふしぎな透徹——積迢空	107
若山喜志子	『若山喜志子全歌集』	112
	戦後十年の生活歌——若山喜志子	114
矢代東村	小野弘子 渾身の書『父 矢代東村』	115
尾山篤二郎	尾山篤二郎——その人・論・作品	119
松村英一	「国民文学」と松村英一	126
	「松村英一の一首」から	130
土屋文明	土屋文明のうた	135
	土屋文明座談	136
	自選歌集『放水路』	138
額田島二郎	私の稀観本——額田島二郎『流民』	141
山本雄一	「立春」時代の山本雄一	143
	「潮音」時代の山本雄一	149
福田たの子	福田たの子の一首	154
	『定家かづら』	155
木俣 修	木俣修の一首	159
坪野哲久	『碧巖』	161
葛原妙子	葛原妙子——絶対の探求	164
	葛原妙子を読む(一)～(六)	168
	葛原妙子——凝視と氾濫(『橙黄』から『飛行』まで)	200

- 葛原妙子
 葛原妙子——推敲と歌体
 葛原妙子の素顔——メソポタミアの女神
- 野村 清
 野村清——「形而上のよろこび」
 『暫紅集』『暫紅新集』——老年の厳しさ
- 小暮政次
 渡辺直己——従軍詠のリアリズム
- 渡辺直己
 風土との格闘——斎藤史の秀歌
- 齋藤 史
 齋藤史の一首
- 横田専一
 横田専一小論——『めたほりずむ』を中心に
 時代との格闘——福田榮一
- 福田榮一
 思索的抒情の意味——『この花に及かず』
- 太田青丘
 太田青丘の「歴史観的社会詠」
- 佐藤佐太郎
 『帰潮』の二首
- 佐太郎の技法
- 香川 進
 香川進の戦後のうた
- 鈴木幸輔
 鈴木幸輔の歌の抒情——「萬曆」を中心に
- 宮崎信義
 『宮崎信義短歌作品集Ⅱ』——九十代歌人の新短歌
- 宮 柁二
 宮柁二のうた
 柁二と佐太郎と芳美——無への抵抗として
 宮柁二——妻を詠む歌
 宮柁二の一首

	近藤芳美	『埃吹く街』	286
	近藤芳美	——時代を透視する歌（インタビュー）	291
	『未明』		305
	山崎方代	山崎方代の歌を通して——スケールの大きい歌とは	308
	『山崎方代全歌集』		310
	山崎方代	山崎方代の一首	312
	わが方代の一首		313
	ヴィヨンの歌		314
	岡部桂一郎	岡部桂一郎のうた	316
	清水房雄	『老耄草句』——リズムとニヒリズム	319
	千代國一	千代國一の一首	322
	森岡貞香	『百乳文』	323
	森岡貞香	——歌のかたちを作る（インタビュー）	326
	太田絢子	『太田絢子全歌集』——紫の歌と薔薇のうた	343
	石黒清介	『雪後』	348
	『人間の小屋以前』		351
	『海嶺』——艶と断念		354
	田谷鋭と寺山修司		357
	田谷鋭のうた		359
	田谷鋭	田谷鋭——白秋と柗二の間（インタビュー）	364

- 田谷 鋭
 浜田蝶二郎
 武川忠一
 竹山 広
 塚本邦雄
 白石 昂
 草柳繁一
 片山貞美
 田谷鋭の歌と出会う
 『この世的なる』
 浜田さんへの「弔文」
 『緑稜』
 竹山広のうた
 『装飾楽句』
 『風道』
 『現代短歌とは何か』——若山牧水と長谷川銀作
 『胡麻よ、ひらけ』のユニークさ
 『魚雨』——行動写生
 片山貞美の座談
 片山さんと「戦中派」の人々
 『雪のあと』——歌のうた
 紅野敏郎——近代文学の「森」をゆく（インタビュー）
 中井英夫——厚のうた
 河野愛子の一首
 河野愛子のうた——官能と思索と
 中城ふみ子——ラジカルな女歌
 潮音と中城ふみ子とアララギと
 『これがわが』
- 456 451 447 441 440 437 418 416 413 411 408 405 403 401 396 392 389 387 384 382